

平成30年度

事業活動報告書



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

I. 法人の概要

(平成31年3月31日現在)

法人の名称	公益財団法人吉野川紀の川源流物語
設立年月日	平成14年4月1日 平成24年4月1日名称変更し、移行したことにより設立
定款に定める目的	この法人は、「樹と水と人の共生」を目指し、吉野川・紀の川の源流部を拠点に、その自然的価値、文化的価値を大切に、流域をはじめ都市部の人々にこれを伝え、共に考え、行動するため、体験学習・交流活動を通じて、広く啓発や環境教育に関する事業を行う。そして、これに必要な拠点施設や関連公共施設の維持管理・運営に関する事業を行い、源流域の自然環境保全活動に努める。これらの活動により、流域をはじめ都市部の人々と水源地域を結び、もってそれらの人々の公共利益に寄与することを目的とする。
定款に定める事業内容	この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。 (1) 環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業 ① 「吉野川源流－水源地の森」体験学習プログラムの提供 ② 森づくり体験学習プログラムの提供 ③ 体験学習を通じた環境教育の実施及び支援 ④ 水源地域の環境保全にかかわる人材の育成 (2) 流域交流・啓発にかかわる事業 ① 水源地域の自然及び文化を介した交流行事の実施 ② 水源地域の環境保全の普及啓発のための行事等の開催、印刷物等の刊行、電子情報媒体の作成 (3) 源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業 ① 水源地域及び流域における参加型観察調査会の実施 ② 「吉野川源流－水源地の森」自然実態調査の実施 ③ 源流部における斜面崩壊地での対策実験及び経過観察の実施 (4) 拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業 ① 展示を通じて情報発信を行う施設の管理・運営 ② 源流部での体験活動の拠点となる森とこれに付随する施設の管理 (5) 学習教材や、啓発関連物品等の販売 (6) 他団体からの依頼にもとづいてこの法人が構築する情報や技術によって対応可能な業務の受託 (7) その他この法人の目的を達成するために必要な事業 2 前項第1号から第4号までの事業は、公益目的事業とし、奈良県内で行う。
主たる事務所	〒639-3553 奈良県吉野郡川上村大字迫 1374 番地の1

<p>役 員 等</p>	<p>評議員（五十音順）</p> <p>石井 一良（奈良県水道局長） 浦西 勉（龍谷大学教授 元奈良県教育委員会） 新井 寿彦（川上村教育委員会次長） 芝 英司（和歌山県企画部地域振興局地域政策課長） 霜上 民生（一般社団法人近畿建設協会理事長） 白井 光典（和歌山市企業局長） 中平 繁和（川上村議会総務文教委員長） 東谷 八宗（川上村議会議長） 宮岸 幸正（大阪工業大学副学長） 森脇 深（川上村地域振興課長） 山口 孝次（橋本市上下水道部長） 山下 保典（奈良県地域振興部長）</p> <p>理事（代表理事・業務執行理事を除き五十音順）</p> <p>栗山 忠昭 代表理事・理事長（川上村長） 阪口 和久 代表理事・副理事長（川上村副村長） 今福 和男 業務執行理事（川上村水源地課長） 辻谷 達雄（元 森と水の源流館館長） 西久保 智美（コミュニティライター） 橋本 裕行（奈良県立橿原考古学研究所企画部企画課長） 宮口 侗迪（早稲田大学名誉教授） 村上 健（奈良県地域振興部地域政策課長） 横田 岳人（龍谷大学准教授 教養教育センター副センター長）</p> <p>監事（五十音順）</p> <p>辰巳 八郎（川上村監査委員） 中島 誠（税理士）</p>
<p>主 な 会 議</p>	<p>定例理事会 6月 8日（前年度事業報告及び決算の件ほか） 定時評議員会 6月25日（評議員選任の件、理事・監事の選任の件 前年度事業報告及び計算書類等の承認） 臨時理事会 6月26日（代表理事、業務執行理事の選定） 臨時理事会 12月16日（利益相反取引に関する承認） 定例理事会 3月26日（次年度事業計画及び収支予算書の件ほか）</p>

II. 事業の状況

公益事業Ⅰ	環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業			
<p>吉野川・紀の川の源流及び水源地域の自然環境や文化を資源とした環境学習及び体験等のプログラム実施を通じて、環境保全や保護についてともに考え、行動するきっかけを提供する。そして流域をはじめ都市部の人々と水源地域の交流を促進し、これらの地域の環境に対する意識の向上ならびに環境保全に寄与する事業。</p>				
	時期	回数	参加数等	概要
水源地の森ツアー(一般公募型)	4・7・11月	3回	66名	「水源地の森」での体験学習
団体(企業含む)研修等での利用	通年	58件	1,500名	水源地の森散策や森づくり体験等
環境教育支援(学校対応)	通年	83件	4,247名	小学校から大学の見学案内及び出張源流教室
森と水の源流館授業づくりセミナー	7～1月	5回	60名	近畿 ESD コンソーシアムとの連携事業で教員のための授業計画づくり
源流学の森づくり (源流人会等の活動)	5・7・8・11月	4回	104名	一旦伐採された二次林での森林整理作業
草刈りボランティアの機会づくり (川上村「未来への風景づくり」)	6月	1回	10名	旧白屋地区の草刈り・外来種駆除を行い、水源地域の環境保全にかかわる人材育成

公益事業Ⅱ	流域交流・啓発にかかわる事業			
<p>吉野川・紀の川流域をはじめ都市部の人々と相互に交流することによって、源流及び水源地域の自然環境や文化的価値を見出し、大切に守り育てていくことを目的とした啓発イベントや講座を実施する。そして自然環境について高い意識をもった人材育成につなげることで、これらの地域環境保全ならびに向上に寄与する。</p>				
	時期	回数	参加数等	概要
夏休み(館内)プログラム	7～8月	7種	87名	観察ノート、・館内ガイドツアー、ミニ自然観察会、木のポンポンほか
源流のつどい	9・1月	2回	43名	巨樹めぐり、氷瀑ツアー
川上村「源流の日」記念授業	11月16日	3回	100名	地元子どもたちへ和歌山県立自然博物館との連携による海とのつながりを授業化
川上村環境基本計画推進業務	通年	4回	100名	住民参加の環境クラブ活動と役場公共施設職員研修等
森守募金キャンペーン on おはなしカーニバル	5月27日	1回	400名	多様な団体とともに実行委員会形式で運営に参加し募金を呼びかけ
流域等各地へのPRキャラバン	通年	14回	682名	橿原市昆虫館虫まつり、和歌山おもしろ環境まつりほかへ出展
機関誌『ぼたり』発行	7・11・3月	3回	-	財団の動きや各事業報告・調査レポートなど

公益事業Ⅲ		源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業			
吉野川・紀の川流域の源流部における自然的価値及び文化的価値を大切にするため、流域をはじめ都市部の人々にも参加を求めながら調査・研究を行い、その成果の発信を行うことを通じて、これらの地域の環境保全ならびに向上に寄与する。					
	時期	回数	参加数等	概要	
吉野川紀の川しらべ隊	4・5・8月	4回	219名	参加体験型でのコケ・水生生物・昆虫・野鳥の観察	
旧白屋地区の定期観察と発信	5・6・10月	5回	—	白屋地区の植物相、昆虫相について定期的に観察し、記録・発信	
水源地の森自然環境調査	7・9・10月	3回	6名	維管束植物(重要種)の調査	
専門家による調査・研究	6・8月	4回	16名	植物(下層植生・トガサワラ)など研究者の調査支援	
地域おこし協力隊受入による調査研究・発信	通年	—	—	昆虫を指標とする地域環境の把握、発信。教材の開発など	

公益事業Ⅳ		拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業			
水源地域における環境保全の啓発や環境教育を行う拠点となる施設やフィールドを一体的に維持管理及び運営を行うことで、地域環境保全ならびに向上に寄与する。					
	時期	回数	参加数等	概要	
「森と水の源流館」管理	通年	—	利用者 11,805名	日常の維持・管理、運営、定期点検、清掃、補修企画展「身近な野鳥」、シアターコンサート等	
「吉野川源流—水源地の森」管理	通年	49回	—	散策路周辺の見回り・点検、補修(入山者479名)	
「水源地の森交流施設」管理	通年	15回	—	水源地の森に付帯する休憩・管理施設の見回り・点検、補修	

収益事業Ⅰ	ミュージアムショップ事業
拠点施設において、訪問の記念となる品とともに、源流及び水源地域の支援・PR並びに自然環境の保全・啓発等に寄与する関連商品の販売を行う。	
概要	
オリジナル商品(副読本・絵本・ポストカード・楽曲 CD など)、地域の自然・歴史・文化・伝承を紹介した商品(書籍・地図など)、村内で生産された商品(ペットボトル入湧水・雑貨品など)、自然観察用品(野帳・ルーペなど)のほか、夏休み・企画展などに合わせ、関連する書籍や商品を適宜販売。	

収益事業Ⅱ	受託事業		
他団体からの依頼にもとづいて当財団が構築する情報や技術によって対応可能な業務を受託し、実施する。			
	委託者	時期	概要
和歌山市民の森管理業務委託	和歌山市	8～3月	3haの二次林管理作業
和歌山市民の森源流体験学習業務委託	和歌山市	10・11月	水源地の森学習会として実施
水のつながりプロジェクト実施等に係る業務	川上村	4～12月	農作業や源流散策など平野部との相互交流事業実施支援、報告書作成
吉野川紀の川型流域連携モデルの具現化業務	川上村	2～3月	上流・中流・下流のめぐみと人をテーマにつながり視覚化・PR展開
川上宣言モニュメント計画検討業務委託	川上村	5～3月	川上宣言のなりたちや価値をあらため共有化し、モニュメントとして表現する
啓発用間伐材割箸セット製作	森林環境保全促進 和歌山市議会議員連盟	11～2月	和歌山市内での啓発活動ためのメッセージ入台紙付の間伐材割箸企画製作

公益事業Ⅰ 環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業

一般公募や団体の要望により企画する「水源地の森ツアー」のほか、源流地域の自然や文化にふれる体験型ツアー形式などによる研修の受け入れを行った。

【一般公募型 水源地の森ツアー】

4月・7月・11月開催、66名が参加。



【企業や行政など団体による研修等の利用】



奈良県新規採用職員研修 (4/13)



吉野郡社会科教員研修 (6/28)



関西電力労働組合森づくり (11/9・10)

関西電力労働組合の森づくり体験では、除伐のほか昨年度に引き続き、地域への協力（伯母谷地区の清掃活動）を実施。



流域協議会水源地の森ツアー (3/24)

【環境教育支援(学校対応)】

森林環境学習の受入れや「出張源流教室」を実施。森林環境保全促進和歌山市議会議員連盟から和歌山市教育委員会への呼びかけでも実施。



五條市立五條小学校 4年生 (5/31)



出張源流教室 (19件)

【森と水の源流館授業づくりセミナー(近畿 ESD コンソーシアム)】

現役小学校教員を対象に実際に学校で行う授業の単元計画作成に対し、奈良教育大学が指導にあたるセミナー。森と水の源流館を会場に5回連続で開催。川上村内の河川で水生生物観察実習も交えて開催した。今回より地元の川上小学校の教員も参加。あらためて地域の素材を教材化した授業に取り組んだ結果、「ESD ティーチャー」の認定証を授与するに至った。



【源流人会の活動】

水源地域の環境保全にかかわる人材育成。山村で培われた知恵、技を「源流学」として共有。



「源流学の森づくり」(5/3・11/23)



「白屋草刈りボランティア」(6/2)

公益事業Ⅱ 流域交流・啓発にかかわる事業

源流地域の魅力を介して、都市部の人々との交流をはかる催しの開催や、各地に出向いてのPR・普及啓発に取り組んだ。

【源流のつどい】

川上村内の巨樹めぐり、御船の滝へのエコツアーを実施した。また他地域で活動する団体の会員との相互交流を実施。



「川上村の巨樹めぐり」(9/8)



「御船の滝氷瀑ツアー」(1/26)



NPO 法人山野草の里との交流会(左:川上村 7/21 右:桜井市 8/25)

【川上村「源流の日」記念授業】

全国豊かな海づくり大会を機に制定されたこの日に、和歌山県立自然博物館の協力で、森と海のつながりに気づくための移動水族館の授業を展開。川上村の保育園、小・中学校それぞれに向けた授業を実施。



【川上村環境基本計画推進業務】

役場・公共施設職員の研修会や村民を対象とした流域学習会、和歌山市生活排水対策指導員交流の支援などを実施した。職員研修では、奈良教育大学次世代教員養成センターの中澤静男准教授を講師に、SDGsとESD周知のための勉強会を実施した。「環境クラブ活動」では、郷土料理の講習会や杉樽で醸成する醤油蔵を村民とともに研修。



研修会「それでESDって何ですか」(7/17)



流域学習会 片上醤油見学(御所市 3/11)

【水源地の森守募金】

川上村などと共催する「おはなしカーニバル」での募金活動のほか、川上小学校の児童より、「ダムカレーから学ぶ水源地の森」授業で栽培、販売した野菜の売上金を募金として授与。



おはなしカーニバル(5/27)



川上小学校5年生からの募金(3/27)

【流域等各地での情報発信・PR、啓発活動】

流域市町村で開催される行事への出展のほか、協力団体が参加、開催する行事での出展。



橿原市昆虫館「むし祭」出展(6/17)



枚方市立菅原生涯学習センター出展(2/24)

【夏休み(館内)プログラム】

例年の「宿題応援」プログラムに加えて、「かぶる夏」と題し、館内にかぶりものを配置。また盆期間を中心に外部から講師を招いた体験プログラムも開催。



「木のポンポンづくり」(8/19)



【機関誌『ぼたり』No.42・43・44号発刊】

活動報告や調査結果などを記載し、夏・冬・春の定期発刊。源流人会会員、村内観光施設、村内図書館、国会図書館ほかへ配布している。



公益事業Ⅲ 源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業

調査事業では、源流地域の環境の実態把握と周知をねらいとして、流域をはじめ都市部の人々に協力を呼び掛けた参加型の調査も実施した。

【吉野川紀の川しらべ隊】

川上村内のほか、吉野町など流域市町村をフィールドに観察会を実施。



「ギフチョウをしらべよう」(4/21 川上村)



「身近な野鳥と虫をしらべよう」(4/28 川上村)



「吉野山のコケを調べよう」(5/6 吉野町)



「水生生物をしらべよう」(8/4 川上村)

【専門家や研究者による調査・視察】



「水源地の森」下層植生調査(6/16・17)
旧白屋地区の定点観察と発信(通年)



【地域おこし協力隊による調査研究・発信事業】

地域おこし協力隊として1名を受け入れ、調査研究や交流事業に従事した。

吉野川紀の川流域で活動する自然環境保全・体験団体と連携した流域フィールド調査。水生生物観察会等の指導、ESD の視点をいかした学校配布用教材の作成のための検討、また外来種カマキリの県内侵入についての啓発と情報提供の呼びかけ等に取り組んだ。



水生生物観察会での指導

外来カマキリ 県内も注意を

寺社多い奈良 ↓ 竹ぼうき多い ↓ 輸入品に卵

森と水の源流館「在来種駆逐の恐れ」

中国製竹ぼうきに付着したムネアカハラヒロカマキリの卵を石でつぶったムネアカハラヒロカマキリ（写真）

中国製竹ぼうきに付着したムネアカハラヒロカマキリの卵を石でつぶったムネアカハラヒロカマキリ（写真）

外来種カマキリ報道発表（12/5）

水辺に暮らす生きものたちと知恵くらべしよう

生きものからの挑戦状！

VSトンボ編

- 1 このスピードについてこれるか！
- 2 しっぺりしてるぞ！
- 3 パフォーマンス万全だ！

教材型ポスター成果品（B2 サイズ）

公益事業Ⅳ 拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業

【「森と水の源流館」の管理】

指定管理協定にもとづき施設の維持管理、案内や企画展・歳時展示を実施。



企画展「川上村の巨樹・古木」(9/3～10/28)



「川上村の身近な野鳥写真展」(11/8～3/31)



「大滝ダム運用開始5周年」「丹生川上神社上社遷座 20 年祭」に合わせた展示も実施。



修繕時に機能が向上した源流の森シアター演出照明の披露を兼ねて冬季イベントを実施。

「冬の森コンサート」(左:2/24)

クリスマス時期のジオラマライトアップ「モリナリエ」



【「吉野川源流－水源地の森」・「水源地の森交流施設」の管理】



「水源地の森」内の見回りと散策路・木橋等の点検・補修などを実施。



「水源地の森交流施設（休憩小屋・管理棟）」の定期的な見回り・点検・清掃・修繕を実施。例年大雨により流出する休憩小屋前の木橋の復旧、また休憩小屋に掛かった倒木を発見し役場へ通報、管理棟に付帯するバイオトイレの電気回路の修理などを実施。



収益事業（受託事業）

【和歌山市民の森源流体験学習業務】(和歌山市)

平成 16 年度から継続する和歌山市民の森づくり事業。現在は、「水源地の森」での学習会を実施している。(10/13、11/17 実施)



【水のつながりプロジェクト実施等に関する業務】(川上村)

大和平野土地改良区の農作業の体験を通じて、源流部と平野部の小学校の交流事業や源流体験の運営と取組みを発信するレポート作成を受託。



川上小学校へのバケツ稲贈呈(6/28)



稲刈り体験(10/18)(橿原市内)



源流体験(左:子ども向け源流体験(9/13))



【吉野川紀の川型流域連携モデルの具現化業務】(川上村)

吉野川流域の産業従事者や教育関係機関を中心とするキーパーソンとともに取組む「紀の川じるし」の活動をさらに具現化し、浸透させ、協力者を広げるための業務。「紀の川じるし」の取組みは、平成30年版の『環境白書』で紹介された。

🔍
事例


**「紀の川じるし」で流域の産業を元気に
(奈良県川上村、吉野川・紀の川流域14市町村)**

奈良県川上村を源流とする吉野川は、水道水や農業用水として奈良盆地に恵みを届けながら、和歌山県に入り「紀の川」と名前を変え、紀伊水道の海へと注ぐ一級河川です。この川は、古くから上流域の林業、中流域の農業、河口域の漁業と質の高い農林水産業や流域の景観・風土を育てています。

同村は「水源地の村」として、1996年に「川上宣言」を全国に発信し、最源流部の原生林約740haを「水源地の森」として購入して、森林の保全活動等を行ってきました。また、吉野川・紀の川流域の14市町村と連携した事業を実施し、流域の住民と共に水源地の村づくりを進めてきました。

さらに、吉野川・紀の川の流域をひとつの「商店街」に見立て、川の流れがもたらす地域の「恵み」をブランド化し、地域を元気にして、水源の森を守り、流域の環境を守る意識を広めるため、2015年に林業、農業、漁業のキーパーソンとともに「紀の川じるし」というブランドを立ち上げました。川による森・里（大地）・海のつながりを「見える化」し、それぞれの場所や人のおもいと気質が詰まった産品を消費者に手に取ってもらうことで、流域ぐるみで各地域の課題解決を目指しています。また「水源地の森」や流域の自然、地域産業の「恵み」を教材とした「紀の川じるしのESD」にも取り組んでいます。

「紀の川じるし」ポスター



資料：奈良県川上村

平成30年版『環境白書』で紹介された「紀の川じるし」の取組み



「紀の川じるしの見本市」(3/21~24)



和歌山市内の小学校では、「紀の川じるしのESD」として紀の川を学び、川上村や漁港を訪ねた。さらに源流から海までの恵みを販売する模擬店を開催

【川上宣言モニュメント計画検討業務委託】(川上村)

あらためて「川上宣言」に光をあて、その意味やこれまでの成果を多くの人に気づいてもらうため、モニュメントとしてのカタチのあり方だけの結論を出すのではなく、この業務を機会としていかに、モニュメントとなるまでのプロセスが発信や収集の有効な仕掛けとなることを意識した。



「川上宣言」をふりかえり、発信する新聞企画(奈良新聞 12/26)

【啓発用間伐材割箸セット作成】(森林環境保全促進和歌山市議会議員連盟)

議連の活動として、議員連盟が配布する啓発ツールを製作。



パブリシティ（新聞ほか掲載記事）

里山の環境保全を

森と水の源流館 白屋地区で散策と草刈り

外来植物など駆除も

川上

川上村の「森と水の源流館」は、大滝ダム建設中の地すべりで全戸移転した同村白屋地区で、草刈りや外来種の駆除を行った。併せて、参加した県内外のボランティア約10人が同地区内を散策し、里山の自然に残る植物や昆虫と触れ合った。



アメリカオニザミ刈り取る参加者川上村白屋

同村は、人の手を入れたことと同地区の里山環境を保全しようとして、「未来への風景づくり」プロジェクトを発足。企業、団体とも協働して植樹や草刈りに取り組んでいる。

当日は、住居跡の1区画に生い茂った雑草を鎌で刈り取り。また同地区内の散策では、同館の植物と昆虫の担当者が白屋八幡神社跡に自生するタブ林の希少性や、ヒナバッタが鳴くしくみなどを解説した。途中、胸の高さほどある外来種「アメリカオニザミ」が見つかり、参加者が懸命に刈っていた。

大阪府堺市から参加の磯崎美樹さん(39)と娘の心紀ちゃん(9)は「アザミを取ったらすつきりした。イナゴの鳴き声が面白かった」と笑顔だった。

毎日新聞 9.12

守り育てた巨樹たち

写真展示 由来の説明も

川上

川上村内の古木の写真を集めた「川上村の巨樹(写真)めぐり」が同村迫の「森と水の源流館」で開かれている。多くの木は山村の人たちが数百年かけて守り、育て、共生

した。川上村の古木の写真を集めた「川上村の巨樹(写真)めぐり」が同村迫の「森と水の源流館」で開かれている。多くの木は山村の人たちが数百年かけて守り、育て、共生した。川上村の古木の写真を集めた「川上村の巨樹(写真)めぐり」が同村迫の「森と水の源流館」で開かれている。多くの木は山村の人たちが数百年かけて守り、育て、共生した。川上村の古木の写真を集めた「川上村の巨樹(写真)めぐり」が同村迫の「森と水の源流館」で開かれている。多くの木は山村の人たちが数百年かけて守り、育て、共生した。



川上村の古木の写真を集めた「川上村の巨樹(写真)めぐり」が同村迫の「森と水の源流館」で開かれている。多くの木は山村の人たちが数百年かけて守り、育て、共生した。川上村の古木の写真を集めた「川上村の巨樹(写真)めぐり」が同村迫の「森と水の源流館」で開かれている。多くの木は山村の人たちが数百年かけて守り、育て、共生した。

各写真は横25センチ、縦37センチで、大きさや由来の説明が付く。同館が2009年に発行した冊子「川上村の巨樹」の内容を下敷きに、多くを撮り直したという。10月28日まで。午前9時〜午後5時。高校生以上400円、小学生200円。【栗栖健】

ESDさらに連携を

近畿コンソーシアム総会 活動拡大に意欲



持続可能な開発のための教育(ESD)を推進する近畿ESDコンソーシアム(加藤久雄会長)の総会が7日、奈良市高畑町の奈良教育大学で開かれた。県内外の教育関係者や民間団体の代表ら約50人が出席した。

同コンソーシアムはより幅広い連携で活動を拡大しようと、これまでの「奈良ESDコンソーシアム」から改称。この日は、同コンソーシアムが教員を対象に確立したESD実践研修の全国展開など今年度の事業計画が報告され、総会後の研修会では県内の小学校教諭からの実践報告を受け、参加者がグループ討論を実施した。

同コンソーシアムは同大、県内外の教育機関、社会教育施設、地元企業などを構成団体に26年度にスタート。

参加者はこれまでの経緯をふまえ、さらなる活動の拡大、発展に務めることを確認し合った。

教育現場での実践報告の様子―7日、奈良市高畑町の奈良教育大

へき地教育の実践紹介

近畿ESDコンソーシアム 成果発表と交流会

奈良

持続可能な開発のための教育(ESD)を推進する学校や企業、地域でつくる「近畿ESDコンソーシアム」の成果発表会・実践交流会が26、27の両日、奈良市高畑町の奈良教育大学で行われた。全国でESDに取り組む約150人が参加した。

26日には「へき地教育とESD」をテーマにシンポジウムを実施。元曾爾村立曾爾小学校長の松岡清之さん、沖繩県国頭村で少人数教育に取り組む大島順子琉球大学准教

授、東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センターの及川幸彦主任研究員がそれぞれ報告した。大島さん



へき地教育とESDについて語り合う参加者―26日、奈良市高畑町の奈良教育大

人は国頭村の地域住民と学校の強い結びつきを語った。また及川さんは福島県只見町の実践を通して、故郷の良さや価値を実感する「地域共生型ESD」を、東京一

極集中に対する切り札とした。このあと参加者はグループに分かれて意見を交換した。同コンソーシアム事務局長の中沢静男奈良教育大准教授は「へき地にとって持続可能な

社会の構築は緊急の課題。グローバルな視点で持続可能な社会の担い手を育成するESDとへき地教育の中核は同じ」と話した。このほか児童による実践発表もあった。

水家の夏休み2018

(森と水の源流館) 編

『紀の川じるしのESD』のテーマソング

水の旅のはなし

詞: 尾上忠大 (森と水の源流館)
曲: 松谷文美

どこから やってくるのかな?
 美味しいね このお水

どうして つくって いるのかな?
 どうして とれな が ならん の?
 どうして とつ ぐ くん だ

美味しいね このお米

でもはてな?
 水はどこから来るの?
 水はなぜ始まるの?

美味しいね お魚も

でもはてな?
 海にも川が そそい でる

美味しいね このお水

でもはてな?
 つながってるんだ ぼくたちと

美味しいね このお水

でもはてな?
 つながってるんだ ゆたかな森と

美味しいね このお水

でもはてな?
 つながってるんだ ゆたかな海は

お互いに文化体験

■源流館(道の駅)の茶室で開かれ、和歌山市内の小学校では、児童が川土知太(和歌山県)を題材に、絵画や短歌を制作し、源流館に展示した。文化体験(大谷谷川)の活動として、和歌山市内の小学校では、児童が川土知太(和歌山県)を題材に、絵画や短歌を制作し、源流館に展示した。



生態系や環境保全学ぶ



清流いつまでも

■トヨタソーシャルフェス「水源地で自然観察」
昨年同様、アクトソーシャルフェスとして、清流をテーマにしたイベントを開催しました。

水源地で自然観察
トヨタソーシャルフェス「水源地で自然観察」を開催しました。

ビオトープを整備

■新穴千代古墳公園(整備の進捗)「オープンは、川土知太(和歌山県)を題材にしたイベントを開催しました。



■森と水の源流館
体験活動を通じて 貴重な天然林を守る

「持続可能な社会をつくる」それを担う人材の育成というテーマに、森と水の源流館ではどうかかわるか?

「紀の川じるしのESD」の展開として 森と水の源流館授業づくりセミナーや 出前講座を届けています。

ESD(Education for Sustainable Development)、つまり 持続可能な社会づくりの担い手を育む教育の推進をめざし、奈良教育大学を核として、教育機関や教育・学習施設、また企業などが参加する近畿ESDコンソーシアムに加わっています。

本年度もESD教育として当館との連携による「授業づくりセミナー」が開催され、奈良県内と和歌山県内の小学校の先生が、同じ「源流」にある川土知太に集まり、水源地や古野川分水などをテーマに授業づくりを行いました。

(くわしくは、「近畿ESDコンソーシアム」で検索下さい)

また森林環境保全促進和歌山市議員選挙連盟の取組において、和歌山市内の小学校へ「紀の川じるしのESD」のテーマソング「水の旅のはなし」を教材とした出張講座を開催しています。

森と水の源流館
水源地の村かわかみ

〒630-3552 奈良県吉野郡川上村1374-1(道の駅)
電話 0746-52-9888 FAX 0746-52-0388
http://www.genryuu.or.jp
公益財団法人 吉野川紀の川源流物館

みんなとだから、できること。

TOYOTA SOCIAL FES 2018

参加者 募集中!!

ENTRY KIT

参加無料

申し込み方法

はがきに、代表者のご住所を記入し、封筒に入れてお送りください。お申し込みいただいた個人情報は、本事業以外の目的は一切使用しません。

奈良県: きれいな吉野川を未来に残そうプロジェクト
第2回: 水源地の森を学び、体験しよう!

期日: 2018年9月22日(土) 10:00~12:30 (受付9:30~)

開催場所: あきつ小野スポーツ公園(和歌山県吉野郡川上村吉野川)

参加人数: 150人

募集期間: 9月7日(金)必着

主催: 森と水の源流館(公益財団法人吉野川紀の川源流物館)、奈良新聞社、森か川上村

問合せ: 0746-52-9888

きょう8月1日は

水の日

水の恵みに感謝

水は生命の源であり、人々の生活潤いを与え、産業文化の発展に重要な役割を果たしている。一方で、人々の暮らしの変化や気候変動などで、雨水も洪水、水質汚濁、生態系への影響など水をめぐるさまざまな問題も起きている。そこで、水は人類共通の貴重な財産であり、健全な水循環の維持・回復をはかることを目的とした「水循環基本法」が施行され、8月1日が「水の日」と定められた。

観察するため水生生物を採取する児童＝藤城市立南



夏本番を迎え、子どもたちが身近な川や水辺に親しむ機会を増えている。水辺の生き物やのれいや藻類などの水生生物を観察し、川の水質や水辺の環境を学ぶ機会も増えている。今夏行われているイベントの多くは、水辺の生き物や水質を観察する機会も増えている。

水の生き物に歓声

浄化へ理解深める

みんなのこぼし水は、同じく7月16日の町内各所の排水川では、第2回「みんなのこぼし水」が実施された。参加した親子連れは、「なるべく天和川に流さないで、川の水を汚さないように排水方法を考える」と、排水方法を考える。その際、会場では「みんなのこぼし水」の排水方法を学ぶ。また、会場では「みんなのこぼし水」の排水方法を学ぶ。また、会場では「みんなのこぼし水」の排水方法を学ぶ。



飛鳥川などの水質調査に取り組み子どもたち

水家の夏休み2018

〈大和信用金庫〉編

川の清掃活動

川の水位が上がった後はこうしてゴミがひっかかっているんだよな〜

わー! ゴミの花だー!

洗剤はきちんと計って使わずに! 洗いすぎないように!

カレーのお鍋は古紙でふきとってから洗うといいのよ!

生活排水をきれいに!

大和川定期預金

水質UPで〜

金利もUP!

預金残高もUP!

ふるさと大和川源流体験ツアー

毎年大人気の源流ツアーにも協賛しています!

お父さんカニ! カニ!

みんな来てね!

夏のワンプオンポイント情報

やましん 大和川定期預金

水質改善度合いで 0.05%金利上乘せ

大和川定期預金は、0.05%の金利を適用。また水質改善度合いによりさらさら0.05%が追加される。現金ながら水質が改善とならなかつた場合でも、初回適用日までには預入れ時の0.05%がそのまま適用される。今回も相応して水切りネット発行、各家庭からの生活排水の浄化に役立つ。

また「大和川定期預金」預入総額の0.01%相当額と同金額の奨励金の寄付金を「大和川定期預金」へ贈られ、大和川再生事業への資金拠出を行っています。

豊かな水、親子で体感

川上でトヨタソーシャルフェス

生き物観察や学習



川で生き物を採る参加者。4日、川上村西河

地域の環境保全を目的としたイベント「TOYOTA SOCIAL FES(トヨタソーシャルフェス)」が4日、川上村西河で開かれた。県内外から約150人の親子連れが参加し、川の生き物観察や学習を通じて豊かな水環境を体感した。

午前と午後の2回の講座を開催。網やざるを手にした家族連れが吉野川支流の音無川に入り、石をめぐるなど工夫しながら、サワガニやカワニナなど10種類を捕まえた。

近くの公園では、県水生生物研究会会長の谷幸三さんが、見つかった生物の体の仕組みや特徴を解説。子どもらはカシカガエルの吸盤に触れ、笑顔を見せていた。

妻と息子2人と参加した奈良市の武田直樹さん(38)は「子どもが自然に触れ合う機会が欲しかったが、どこに行けばいいか知らなかった。初めて見る生き物ばかりで、とても楽しんでいた」と目を細めていた。

川上でフェス 滝見学や川の生物学ぶ

見た触れた 水源の自然



展示を通して水源地の自然について学ぶ参加者。22日、川上村迫の「森と水の源流館」

親子連れら70人

地域の環境保全を目的としたイベント「TOYOTA SOCIAL FES(トヨタソーシャルフェス)」が22日、川上村で開かれた。県内外から親子連れや若者ら約70人が参加し、水源地の豊かな自然を学んだ。

森と水の源流館(同村迫)と奈良新聞社が主催。昨年まで実施していた「アクアソシヤルフェス」を改称したイベント。8月に続く2回目の、今回は「水源地の森を学び、体験しよう!」をテーマに開かれた。

この日は雨天だったため、蜻蛉の滝(同村西河)を見学して同館に移動。シアターで源流の森を紹介する映像を観賞後、大型水槽前で紀の川上流の生き物の説明を受けたり、ニホンシカの骨に触れたりして館内展示を見て回った。

家族で参加した天和郡山市の女性(39)は「子どもが好むので、自然をもっと知ることができたらと参加した。川上村にいろいろな生き物があるんだと知ることができた」と話した。

みんなとだから、できること

TOYOTA SOCIAL FES!! 2018

トヨタのハイブリッドカー AQUA 祭の環境活動、AQUA SOCIAL FES!! 6年間で約7万人が参加したこの活動が、もっと地域を、もっと未来を良くするために変わりました。その名も、TOYOTA SOCIAL FES!! 燃料電池自動車MIRAIや、プリウスPHV、様々なハイブリッド車などに込められた、



「よりよい未来を作るために」という想いのもと、地域の未来を作る活動を全国で行っています。

きれいな吉野川を未来に残そうプロジェクト In 奈良



水生生物の採集と学習
吉野川源流の自然観察

TOYOTA SOCIAL FES!!では、奈良県の美しい自然を守るため、様々な活動を行っています。7年目を迎える今年も2回のプロジェクトを開催しました。第1回は8月4日、約150人が参加し、川上村の吉野川源流・昔川崎の湧き出しで水生生物を観察しました。第2回は9月29日、約10人が参加し、同じく湧きの湧き出しを観察して自然観察を行いました。豊かな水の流れについて学びました。

清流にすむ生き物採集
谷先生のご指導で学習も

第1回は、午前と午後に分かれて活動しました。まず奈良県水生生物研究会会場で環境科博士の谷先生のご指導のもと、川で生き物を採集しました。参加者は網やザルを持って川に入り、5分おきのネットを引っ張りながら、サワガニやカワエビなどの魚や虫などを採集しました。

続いて谷先生が、採集した生き物の体の仕組みや特徴を説明するなど詳しく講義し、子どもたちはわがわがの取



START YOUR IMPOSSIBLE



獲りだりしなから生物の絶滅を防ぐことの大切さを学びました。

水源川上村での取組
自然環境の大切さを学ぶ

第2回は、川上村の湧きの湧きの湧き出しで自然観察を行いました。そして環境学習施設「森と水の環境館」で水源地の森や森林の保全活動について学びました。

湧きの湧き、雄略天皇を襲ったという伝説の地です。森と水の環境館で森林保全活動の大切さを学びました。

また森と水の環境館では、川上村の水源地の森を案内する森を巡るツアー、大型水車の前では川源流の生き物の説明を受けたり、二つの川の源流を辿りながら源流の歴史を学びました。

TOYOTA SOCIAL FES!!

In 奈良に13参加頂いた皆さまへ

今回は参加者が多いのでお詫言いますが、TOYOTA SOCIAL FES!!はこれからも自然環境や社会を良くするために、またこれからも新しい取り組みを実施してまいります。

お問い合わせ トヨタ AQUA SOCIAL FES!!事務局
04-90-999-1111 奈良県中興一社(伊賀市伊賀川)

奈良各地を巡る吉野川
環境保護への新たな取組

吉野川は、川上村をめぐり伊山地区を流れます。降り注いだ雨水は川を流れて、それが湧き水として湧き出たり、また一部の湧き水は、奈良盆地や現川上村の大地を潤します。

TOYOTA SOCIAL FES!!では、この豊かな川とつながる吉野川の源流を守りつづけることに取り組んでいきます。その環境をさらに豊かにするために、湧きの湧き出しや森林の自然環境の保全と共生を推進してまいります。この取り組みを、ぜひ吉野川を未来に残すための環境保護活動として取り組んでまいります。

主催 森と水の環境館
(公益財団法人
吉野川源流の自然環境館)

協賛 奈良新聞社
協力 川上村



企画制作：奈良新聞社

http://toyotasocialfes.jp

奈良新聞社

トヨタカローラ

トヨタ

トヨタ

トヨタ

トヨタ

トヨタ

トヨタ

トヨタ

トヨタ

トヨタ

トヨタ

奈良県川上村の大滝ダムは1990年、ダム本体の着工記念式典を開いた。ダム建設と並行して進めたのが水源地の村づくり。吉野川源流の村として自然や環境に関心のあふれる人と交流を深め、村の活性化につなげる構想だ。

水源地の村づくりを考えたのは役場で2歳下の坂口泰一君です。ダムに沈む村として86年に湖底サミットを開き、ダム嫌いで知られた永六輔さんをおえて

人間発見

招きました。ダム最深部になる地点に90人ほどが集まり、永さんを囲んで水源地を活用すべきだという話に耳を傾けました。

サミットには長野県川上村から前全国町村会長の藤原忠彦さんが来ていて「全国に川上村が6つある。いずれも川の源流にあるので集まろう」と提案がありました。川上村の価値として水源地や源流を生かす発想が芽生えたのはこのときです。

88年に全国の川上村が集まる

覆せ人口減ワースト ⑤

奈良県川上村長 栗山 忠昭さん

全国川上サミットが始まりました。村は94年、水源地保護に責任を持つとした吉野川源流物語という基本構想を作成。96年には源流を守り豊かな生活を築くことをめざした村是といえる川上宣言を全国に発信しました。

99年度からは源流部の手つかずの森林743畝（東京ドーム159個分）を村が10億円で購入、村有林として保護を始めました。こうした活動の核になる施設が2002年開館の「森と

交流と共感を広げ 水源地の村活性化へ

水の源流館」です。源流の森を映像で体感でき、水源地の森ツアーも実施しています。

村には水をつかさどる龍神をまつた丹生川上神社上社がある。旧官幣大社で水没のため98年、高台に遷座した。丹生川上神社は上社のほか、東吉野村に中社、下市町に下社があり、上社の宮司に今の望月康磨さんが来られてから3社の交流が深まりました。水の神様をまつるため、水関係の企業も



水の神をまつる丹生川上神社上社の望月康磨宮司と話す栗山氏

参拝に訪れます。水源地の村づくりは未来への風景づくり事業として企業に植樹などで協力してもらっており、川上村出身で高校の先輩の石橋信夫さんが創業した大和ハウス工業など十数社が参画しています。

今年は大滝ダム竣工5周年、丹生川上神社の遷座20周年、ホテル杉の湯開業30周年です。源流に住む誇りと役割を深めてもらうため、村民に経済的な恩恵が及ぶよう役場に源流ツーリズム推進室を設けました。水源地のエコツーリズムとダム湖のインフラツーリズムをまとめて源流ツーリズムとし、吉野杉工芸品づくりや商品販売に携わる人に利益をもたらす仕組みを考えています。

国を守るべきは民と土です。その国土が異常気象で崩れています。国民の目は山や川から離れ、街ばかりに行っています。森林環境税をきっかけに街の人が「なぜ山のために1000円負担しなければならぬのか」と山に関心を持ってくれれば、水源地の価値が見直されるのではないかと。そうした流れの中で、村に人が住んでくれる状況になればよいと強く思います。

（編集委員 斎藤徹弥が担当しました）

川上で吉野川分水源流トレッキングツアー

水の恵み 歩いて実感

水の恵みで大和平野の農地を支える吉野川分水を学ぶ「吉野川分水源流トレッキングツアー」が9日、川上村内で行われた。県内の親子連れら18人が参加。ダムや豊かな森を巡り、水源地の役割の大切さを体感した。

大迫ダムを見学



大迫ダムを見学する参加者11日、川上村大迫

清掃活動取り組みも

吉野川分水を管理する大和平野土地改良区（橿原市）が主催。

参加者は同村内をバスで巡回したあと、大迫ダムを見学した。管理所の職員が貯水量やダムの役割などを解説。監視が24時間態勢で、降雨量や乾湿状況などに応じて川への放流を決めることを説明した。

続いて吉野川源流部の三之公原生林では、「森と水の源流館」の職員の案内で周辺の豊かな水環境を散策。河原でバーベキュー後に残されたごみを拾い集める清掃活動にも取り組むなど、源流域の環境保全への関心を高めていた。

ヤゴに興味津々

橿原市今井町3丁目、市立今井小学校と、川上村西河の村立川上小学校の4年生児童が13日、同村の吉野川支流の音無川で水生生物の観察を楽しんだ。

かわいい

怖い

児童、音無川で観察



川でつけたオニヤンマのヤゴに興味深そうに見つめる児童＝13日、川上村西河のあぎつの小野公園

今井小は47人、川上小は2人の児童が参加。清流で昆虫や魚の捕獲に取り組んだ。観察会では県水生生物研究会会長の谷幸三さんが、カワヨシノボリやゲンジボタルが生息する環境から、音無川が「水がきれいな川だ」と説明。児童は採集したオニヤンマのヤゴをじっくりと観察し

今井小・川上小

て「かわいい」「怖い」と歓声を上げるなど、水源地の生き物に興味を示していた。児童の交流は、吉野川分水でつながる水源地と盆地の関係を体感する取り組みとして、大和平野土地改良区と同村が平成24年度から実施。10月には同市の田んぼで両校の5年生が稲刈りを体験する。

ザクザク 気持ちいい

川上小 児童ら稲刈り体験

橿原

大和平野土地改良区と川上村は17日、橿原市田中町の水田に、同村立川上小学校の5年生4人と、同市立今井小学校の5年生33人を招き、稲刈り体験を行った。

吉野川分水でつながる両校の児童に、水源の大切さを感じながら交流してもらう目的で、平成24年から実施している。児童らは同町水土里の会の農民の指導で、鎌での稲刈りや、刈り取った稲をワラで束ねる体験をした。

今井小の亀本琉月君

(11)は「鎌で稲を切るのは気持ちよかったです。イライラも解消された」と充実の表情。同じく町田要君(10)は「35株くらい刈ったけれど、しんどくなかった」と笑顔だった。



刈り取った稲を並べる児童＝17日、橿原市田中町

奈良ものろーぐ

(32)

NPO法人「奈良環境を守る会」
ソムリエの食」事務局理事
鉄田憲男



森と水の源流館16年

「森と水の源流館（川上村宮の平）は、吉野川の水源地にある川上村の自然環境や、それらを取り巻く人々の歴史・文化が学べる体験学習施設である。運営は、公益財団法人「吉野川紀の川源流物語」だ。

同館は「3つの役割」を掲げている。「①源流の自然、水源地を守ることの大切さをわかりやすく伝えます。②地球環境問題・水資源問題を『水源地』の視点から考えます。③本当の森や水の『楽しさ』を分かち合う交流の輪を広げます」。

川上村は、吉野川の

源流にある三之公（さんのこ）川流域に生い茂る天然林が伐採の危機にあると知り、山主から約740鉢を購入、「水源地の森」として保全している。

詳しい生態系調査を進める一方で、森林学習の場として同館の主催で「水源地の森ツアー」を実施している。

このツアーは「奈良まほろほソムリエ検定」（奈良商工会議所主催）で2級合格者が1級受

験時の要件となる「体験学習プログラム」に組み込まれているので、私も早くに参加した。

アニメ映画「となり」のトトロ」に出てきそ

うな鬱蒼（うつそう）とした川沿いの森を歩くツアーで、終着点に着くとパーッと視界が広がる。トチ、サワグルミ、シオジなどの巨樹が川を囲み、その間にこけむした巨石がごろりと横たわる。何だか縄文人のような気持ちに浸りながら、おいしく弁当をいただいた。

同館のさまざまな冊子類やイベントを企画するのが事務局長の尾上忠大（ただお）さん（54）だ。神戸市のご出身ながら、川上村に魅せられてこの仕事に就



館内を案内する尾上事務局長

かれた。文筆やデザイン、トークはもとより、最近では作詞も手がける才人である。

その尾上さんからメールをいただいた。同館が手掛ける「紀の川じるし」が、環境省が主催する「グッドライフアワード」において平成28年度の環境大臣特別賞を受賞、30年版の『環

境白書』では「地域循環共生圏の創出に向けた地域間の交流・連携」の好事例として取り上げられたのである。

同白書には、水源地の森の保全

というブランドを立ち上げました」と紹介されている。地方圏では人口減少と高齢化が進み、財政力も乏しい。しかし都市圏は食料、水、木材といった資源やエネルギーの多くを地方圏から得ている。都市圏の人々はこのことを忘れていくのではない。

持続可能な社会をつくり上げるためには、これら地域の間で自然や経済、人的なつながりを強化し、支え合うことで地域の活性化を図らねばならない。

「紀の川じるし」は1本の川による森、里、海のつながりを流域の産品で「見える化」したユニークな取り組みである。

源流館さん、尾上さん、これからも水源地の思いを全国に発信し続けてください。

Ⅱ 毎月第4週連載Ⅱ

『環境白書』に活動紹介

川上を飛ぶ野鳥 生き生きと写す

作品展示

企画展「川上村の身近な野鳥写真展」が、川上村の森と水の源流館で開かれて

いる。写真展。メジロ、キジバト、コゲラなど、よみ目にする20種類を被写体にした作品を展示した。

冬の渡り鳥のジョウビタキは、まき割りをしていてと木から出てくる虫を狙って姿を見せるという。白地に黒いネクタイのような模様があるシジュウカラや、水辺の近くにいるセグロセキレイなど、町中でも見かけるなじみ深い鳥も。一方、川上村では水田がほとんどなく、スズメは見られないといい、写真展でも展示していない。

同館は「展示を見た後、



付近を散策して野鳥を探してほしい」という。来年3月31日まで、水曜と年末年始は休館。午前9時～午後5時。入館料は高校生以上400円、小中学生200円。問い合わせは源流館(0746・52・08888)。



川上の身近な野鳥の写真パネルの前で、子ども向け記念撮影用のかぶり物を持つ木村全邦さん(川上村宮の平)

身近な野鳥 写真で紹介

森と水の源流館

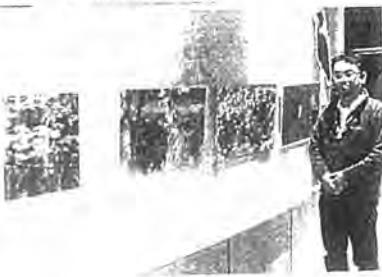
川上 川上村宮の平にある森と

水の源流館で、周辺で観察できる野鳥を紹介する写真展が開かれている。山々に囲まれ、大滝ダム湖に面した同館は、今春から周辺に生息する野鳥の調査を開始。香芝市の野鳥愛好家笹野義一さん(68)に依頼し、撮影を続けている。夏までに渡り鳥を含む計38種類を確認し、うち20種類の写真

パネルを展示した。村鳥のヤマカラ、シヨウビタキ、ツグミなどの大きさ、鳴き声の特色も紹介している。子ども向けに記念撮影用の鳥のかぶり物も用意。村の創作拠点・匠の聚の作家が鳥を題材に制作した絵はがきなどグッズも販売している。

職員の木村全邦さん(45)は「色々な野鳥が身近な自然のなかに結構いると知ってもらえたら」と話す。来年3月31日まで。入館料一般400円、小中学生200円。水曜休館。問い合わせは同館(0746・52・08888)。(福田純也)

森と水の源流館で「野鳥写真展」川上村で見られる身近な野鳥の生態写真を展示する企画展「川上村の身近な野鳥写真展」が森と水の源流館で開かれている。31日まで



り観察してもらおうと、同館が主催。野鳥愛好家の笹野義一さんが撮影したツグミやメジロ、シジュウカラ、アオサギ、ヒヨドリ、カルガモなどの写真が並んでいる。写真展

野鳥の生活をパチリ

森と水の源流館 身近な20種、写真で

身近に見られる野鳥 3月31日まで。同展には香芝市の野鳥愛好家の笹野義一さんと、上牧町の昆虫写真家の伊藤ふくおさんが協力。吉野川沿いの



身近な鳥の写真や紹介文が並ぶ会場＝川上村迫の森と水の源流館

同館周辺で観察された、約20種の野鳥が紹介されている。会場では、水面を飛ぶカルガモや村の鳥やマガラ、黒い羽の白い模様が目立つシヨウビタキなどの写真を、各野鳥の特徴を解説したパネルとともに展示。一瞬の情景に鳥たちの生活が垣間見える。

同館担当者は「身の回りにもさまざまな鳥がいる。少し足を止めて観察してほしい」と話している。

午前9時から午後5時開館。水曜休館。入館料は高校生以上400円、小中学生200円。問い合わせは同館、電話0746(52)08888。

森川海 つながり学ぶ

子供ら、海の生き物観察

川上で「源流の日」授業

森と水の源流館の「源流の日」記念授業が16日、川上村迫の同館で開かれた。吉野川（紀ノ川）源流の同村の子供たち約60人が、河口側の和歌山県の博物館学芸員から海の生き物について学び、川や森とのつながりを体感した。



和歌山県の海の生き物を観察する園児 16日、川上村迫の森と水の源流館

海とつながる水源地の役割を考えてもらう目的で、村条例による同日の「源流の日」に合わせて企画。講師は和歌山県立自然博物館（海南市）の榎善雄主査学芸員ら2人が務めた。

榎主査学芸員らは、村立のやまぶき保育園、川上小学校、川上中学校の子供たちに、紀伊水道などに生息する約10種類の生き物を紹介。園児19人は水槽から取り出したニセクロナマコに触れて喜んだり、泳ぐマツカサウオを興味深そうに観察した。

また小中学生向けの講義では、森がもたらす栄養が川を通して海へ流れ込む仕組みを学習した。



和歌山県の海で採取した生きたナマコなどを観察する子どもたち＝森と水の源流館で

海と森の関係学ぶ

「源流の日」記念授業 川上村児童ら

川上村の学習施設で「源流の日」は、海とつながる水源地ある森と水の源流館（同）平成26年であった「全」の役割を考えようとして、村宮の平）で16日、「源」園豊かな海づくり大会、村条例で定めた記念日。流の日記念授業」が行を記念するとともに、この日は、和歌山県

立自然博物館（同県海南市）から榎善雄主査ら2人の学芸員を招き、村の保育園、小学校、中学校から子どもたち60人が海の生き物について学び、川や森とのつながりを感じた。

授業では、和歌山県の海で採取した生きたナマコやヒトデ、ウニ、マツカサウオなどを源流の森シアターで水槽に展示。それらを学芸員とともに子どもたちが手に取って興味深く観察した。

また、小中学生はチリメンジャコに混じる小さな生物を採すフログラムで多様性について学んだ。海でプランクトンが生息するために必要な栄養は、森でつくられ、川によって運ばれていることを聞いて、子どもたちはうなずいていた。

同館の尾上忠大事務局長は「海づくり大会のテーマ『豊かな森がはぐくむ川と海』をあらためて実感できる一日になった。村の森を守っていく大切さや、川でつながる人との交流の必要性を、これからも発信していきたいと話した。」



期間限定でクリスマスイルミネーションが楽しめる「モリナリエ」川上村迫の森と水の源流館

サンタ訪れる森

川上の「源流館」

クリスマスの装い

初のイルミネーション

川上村迫の森と水の源流館は、同村の水源地の森を体感してもらおうと、初のクリスマスイルミネーション「モリナリエ」の点灯を始めた。開館中の昼間、源流の森の巨木や動物の姿を再現したジオラマを電灯で装飾。「サンタの訪問」を演出している。25日まで。同村三之公地区の水源地の森を映像やジオラマで体感できる「源流の森シアター」のコーナーに、サンタクロースの人形と赤や緑、

来ていたらいいね」と来訪を呼び掛けている。

午前9時から午後5

時開館。水曜休館。入

館料は高校生以上40

円。問い合わせは同館、

電話0746(52)

08888。

イルミネーション

は、室内のLED照明

の色合いに応じて表情

を変える。同館の屋上

忠大事務局長は「一人が

普段見られない森の景

色。やってきたサンタ

クロースが『森を守っ

ていこう』と言ってく

昼も見られるイルミ 森と水の源流館に設置

森と水の源流館（川上の川部分に赤や緑の電飾を施しているほか、下流には職員手作りのソリに乗ったイルミネーション「モリナリエ」が設置され、来館者を楽しませている。写真。25日まで。

モリナリエは「シアター」の暗さを逆手に取り、昼でも見られるように「というユニークな発想から生まれイルミネーション。森の四季や自然を学ぶパノラマ映像を上映する源流の森シアターにある森のジオラマ

の川部分に赤や緑の電飾を施しているほか、下流には職員手作りのソリに乗ったイルミネーションの姿も見られる。

奈良市から訪れた奈良教育大4年の梅村美穂さん（22）は「森の中のサンタとイルミネーションは初めて見た。不思議だけどきれいでいい」とうっとり。同館は「森や川について学びながら、イルミネーションも楽しんでほしい」として



外来カマキリ 県内も注意を



中国などにすむ外来昆虫のムネアカハラビロカマキリが県内でも見つかった。森と水の源流館（川上村高の平）が6日発表した。2000年代に入り少なくとも20都府県で確認され、在来種の個体数が減るなど生態系への影響が報告されているという。中国製竹ぼうきに付着した卵も見つか

このカマキリは、在来種のはらビロカマキリよりも数センチ大きくは長約8センチ、細くびれたような胸の部分が赤っぽいのが特徴。在来種で最大級のオオカマキリ並みの体長で、前脚を振り上げるようにして攻撃するなど攻撃性が強いという。同館職員は古山晴さん(37)に先立ち、県内での確認のきっかけは、上牧町の昆虫写真家の伊藤多々くおさんからの情報提供。



中国製竹ぼうきに付着したムネアカハラビロカマキリの卵
吉野町で見つかったムネアカハラビロカマキリ（腹面）

寺社多い奈良 ↓竹ぼうき多い ↓輸入品に卵

森と水の源流館「在来種駆逐の恐れ」



中国製竹ぼうきに付着した外来カマキリの卵を指さす古山晴さん＝いずれも川上村高の平

までに成虫1匹（オス10、メス1）と卵2個を確認した。大淀町のホームセンターでは、商品の中国製竹ぼうき一本に、孵化を終えた黒っぽいしま模様（卵）（長さ約2センチ）が付着しているのも確認した。寺社や古墳の多い奈良では、こうした竹ぼうきが多く使われ、

外来カマキリが奈良市や吉野町以外でも広範囲に拡散している可能性が高い。樹木で生息する在来カマキリやバッタ類などを駆逐してしまう恐れがあるという。

読売新聞 12. 7

外来カマキリ 県内に現る



吉野町河原屋で10月に捕獲されたムネアカハラビロカマキリの標本。大淀町で買った中国製竹ぼうきに付着していたムネアカハラビロカマキリの卵。立体的に盛り上がったような形が特徴。吉野町河上村で

中国などに分布する外来種の「ムネアカハラビロカマキリ」が今秋、県内で初めて奈良市と吉野町で確認されたと、川上村の森と水の源流館が6日、発表した。2010年以降、少なくとも20都府県で見つかり、在来種を駆逐しているとの報告もあり、特に希少な昆虫が多い吉野地方で生態系への影響が懸念されるという。源流館によると、ムネアカハラビロカマキリは、卵が付いたままの中国製の竹ぼうきが輸入されて広がったとみられる。在来種のハラビロカマキリに似ているが、腹側から見ると胸や腹、足の一部などが赤い。体長約8センチ。在来種では最大級のオオカマキリと同等の大きさで、在来種より孵化の時期が早い上、一つの卵から生まれる数も倍ほど多い。県内では9月16日、奈良市の奈良公園で、昆虫観察会に参加していた少年がオス1匹を捕獲。10月には、

初確認 在来昆虫への影響懸念

源流館企画調査班職員の古山晴さん(37)らが、吉野町河原屋のコンビニエンスストア敷地内などで計10匹を見つけた。9月9日には、奈良市高畑町で孵化後の卵が見つかり、すでに定着している可能性が高い。大淀町のホームセンターでは10月12日、卵が付いた中国製竹ぼうきが見つかった。樹上で生活することが多く、希少な樹上性のバッタ類も駆逐される恐れがあるが、農作物や人には危害がないとされ、輸入が規制される特定外来生物には指定されていない。竹ぼうきは加工品のため、防疫検査の対象外で、古山さんは「現状では、住民一人一人に見つけてもらうしか手立てがない。竹ぼうきや木の枝に注意して、発見した場合は、森と水の源流館（0746-52-0888）へ知らせしてほしい」と呼びかけている。

外来カマキリ 県内にも

攻撃性と繁殖力強い種



吉野町河原屋で採取されたムネアカハラビロカマキリの雄。川上村と水の源流館。

肉食性で攻撃性、繁殖力が強い中国原産のムネアカハラビロカマキリが県内でも見つかった。6日、発表した川上村「森と水の源流館」企画調査班の古山聡さんは「在来種以外のカマキリ、虫を庄造し生態系を乱す恐れがある。分布拡大を食い止める必要がある」と駆除への協力を呼びかけている。

ムネアカハラビロカマキリは長身約20センチ。翅は透明で、胸が赤く、腹は黒い。羽は黄色い斑点がある。ほとんどの木の上で生活し、産卵。在来種のカマキリは人が近づくと逃げることが多いが、この種は人に近づくと、胸を振り回して威嚇する。中国・浙江省から輸入された竹ぼうきに産み付けられた卵も見つかった。問い合わせや情報提供は源流館(0746-32-0000)まで。【熊橋健】

産経新聞 12. 7

外来種カマキリ 県内初確認

中国原産ムネアカハラビロカマキリ

森と水の源流館(川上ビロカマキリを県内で初めて確認したと発表した。カマキリやバッタなど日本に呼びかけている。ムネアカハラビロカマキリは樹上に生息するカマキ

在来種脅かす恐れ



県内で初めて確認されたムネアカハラビロカマキリ。川上村



り、体長8センチ前後。外見はオオカマキリに似ているが一回り小さく、腹部から伸びるのが確認された。愛知県豊田市の、在来種のカマキリを駆逐しているという調査結果も報告されている。成虫は9〜10月頃に産卵するため、冬に見つかるのは卵が多い。卵は白と黒のしま模様で、蝶のさなぎのように木の枝先に立つた状態で産みつけられているのが特徴という。成虫は殺虫剤で、卵は1ミ箱に捨てて焼却処分するのが望ましい。同館では分布域を調査しており、担当者「ムネアカハラビロカマキリが、それとおぼしきカマキリや卵を見つけたら、連絡してほしい」と話している。

川上の自然で 新年祝う門杉

森と水の源流館に設置



源流館の入り口に飾られた「門杉」（川上村で）

吉野杉を使った門松ならぬ「門杉」が、川上村の森と水の源流館の入り口に15日まで設置されている。地元の自然や産品をPRしようと毎年飾っている。高さ約3メートル。吉野杉の酒だ

るを土台に使い、竹の代わりに杉の丸太を斜めに切って中央に立て、杉、ヒノキ、ナンテン、コウヤマキなどの村内で集めた葉を差した。

「オガミムシ」とも呼ばれるというカマキリなどをかたどった板を飾った。担当した職員の古山曉

さん(37)は「生き物に縁起を見つける文化にも思いを深めてもらえれば」と話していた。

虫に恩返ししたい

川上村の「森と水の源流館」を拠点に、自然観察会の講師や企画展示などを担当する同館企画調査班の古山曉さん(37)。「自然が訴えていることを通訳し、多くの方に伝えるのが役割だと思っています」と話す。



広陵町出身。東京農大農学部を卒業し、和歌山山大学院で保全生態学を研究、橿原市昆虫館の臨時職員などを経て、昨年4月から森と水の源流館で勤務している。

新年を迎えるにあたり、同館の玄関前に登場する正月飾り「門杉」に、勝利の象徴とされるトンボや繁栄の象徴とされるハチなど昆虫6種の飾り物を飾り付けた。

「虫が好きなことから人の縁が生まれ、今につながっている。環境を守り、虫に恩返ししたい」と意気込んでいる。

(岳)

ダムカレーが森林保全教材

川上の教員、奈良教育大が評価

奈良教育大は27日、持続可能な開発のための教育を担う「ESDティーチャ―」に、川上村立川上小学校の教員川崎貴寛さん(30)に「写真右」を認証した。地元で栽培された緑のダムカレーを、児童の関心を高め、評価された。

ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で、「持続可能な開発のための教育」の意味。国連「SDGs(持続可能な開発目標)」が採択され、国からの受託事業で同大学が2015年度にこの制度を設けた。地域を教材化するなどの視点を持つ学生や教員を対象に

研修の受講などを通じて、県内の現職教員では53人目だが、山間地では初めてという。



川崎さんは昨秋、5年生4人とプロッコリを校内で栽培。吉野川の水源地の村の森林を「緑のダム」として表現する「かわかみのダムカレー」の店に材料として提供。売上金約2600円を森林保全の基金に寄付する取り組みもした。

村内の森と水の源流館でこの日、加藤久雄学長から認定証を受けた。川崎さんは「これからも村を教材に生かした授業に取り組みたい」と述べた。

(福田純也)

ダムカレーで

「水源地の役割」学ぶ

5年生4人と 学習の導入口に 授業取り組み



「飯とルーでダムを表現、観光客らに人気の川上村「ダムカレー」を学習の導入口に、村の水源地としての役割を考える授業を展開したとして、奈良教育大(奈良市)は、同村立川上小学校講師の川崎貴寛さん(30)にESDティーチャー認定書を授与した。

ESDは持続可能な地域や社会づくりの担い手育成を目的とした教育。同大は文部科学省の委託を受け、教員や大学生を対象とした

ESD実践者の認定制度を導入。連続5回の講座や学習指導案の審査を経て認定される。現職教員では今回で53人目となった。

川崎さんは昨年10月から半年間、「ダムカレー」から学ぶ水源地の森をテーマに授業を計画し、担任する5年生4人と取り組んだ。

村内で販売中のダムカレーが大滝、大迫両ダムに加え、村の森(緑のダム)を表現した点に着目し、村が保全する天然林「水源地の森」での実習や村民への聞き取り調査を実施。紀の川流域で村の森林

栽培し、販売。売り上げは水源地の森の啓発などに使われる募金に寄付した。

3月27日に同村迫の森と水の源流館で認定書授与式があり、加藤久雄学長が川崎さんに認定証を手渡した。

川崎さんは「村を背負うつもりで勉強して」と子供たちに伝えてきたが、よき頭張ってきた。今後は地域と子どもをつなぐ学習をしていきたい」と話した。

川上小学校講師 川崎 貴寛さん 奈教大がESDティーチャーに



加藤学長からESDティーチャー認定書を受け取る川崎さん(右)。川上村迫の森と水の源流館



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

〒639-3553 奈良県吉野郡川上村宮の平

電話 0746-52-0888 FAX0746-52-0388

<http://www.genryuu.or.jp> e-mail: morimizu@genryuu.or.jp